

事業報告書（令和元年度）

事業名 生活者のための日本語教室

団体名 漢字道場

担当者名 江見 優子

※活動の様子がわかる写真（データもお願いします）と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

友好交流サロン（西川アイプラザ4階、岡山市北区幸町10-16）にて

木曜日 18:00～19:30

土曜日 10:30～12:00、13:30～15:00 で開講

曜日、時間を決めると継続して通えないという意見があったことから、後半は個々に都合のいい曜日、時間による個別レッスン形式を採用。

生徒の希望にそった内容のカリキュラムにすることで生徒が生徒を呼び、先生と生徒のバランスのとれた教室運営をすることができた。

2. ESDの視点を取り入れたところ、ESDの視点で見直したところ

「4 質の高い教育をみんなに」「10 人や国の不平等をなくそう」「11 住み続けられるまちづくりを」などの課題解決を意識して授業内容を工夫した。

例：

4→日本語能力試験希望者には試験問題を意識した授業カリキュラム

10→日本語の能力の差により情報難民にならないように行政情報、生活情報の提供

11→東京、大阪にはない岡山の魅力をアピール

3. 取組の成果（参加者にどのような意識や行動の教育上の成果があったか。感想など）

12月の日本語能力試験受験者は希望の級に合格した。また行政情報、生活情報の提供は受講生に喜ばれ、岡山に特化したイベント情報の告知により、イベント参加ができたところも喜ばれた。

4. 今後の課題と展望

ボランティアが運営する日本語教室は岡山市内にも多数存在するが、講師の質や授業内容が系統だっていないなど、問題が山積みである。先のSDGsフォーラムでも分科会の登壇者（ベトナムからの岡大留学生）が指摘していたが、講師はボランティアではなく日本語講師養成講座を修了もしくは日本語講師の免許取得者が行うべきである。質の高い講師を得るためには交通費程度などという謝金ではなく、時給に直したら5,000円程度の謝金があつてしかるべき。そうなると一任意団体が運営する日本語教室では運営していけるはずもなく、そこはちゃんと予算をつけて行政の枠組みの中で公的な日本語教室を作ることが

重要になってくる。

ちなみに既存の西川日本語教室（開催場所：幸町10-16、幸町図書館4階）は20年前にできた日本語教室であり、パイオニアとしての活動には敬意を称するが、最近では講師の高齢化、時代にそぐわないテキストの使用などもあって生徒にはすこぶる評判が悪い。ネットはもちろんのこと動画やパソコン、アプリなどの導入にも消極的であり、講師の世代交代も進んでいないので近い将来においてなんらかの対策が必要である。

行政がおこなう日本語教室運営で参考になるのは総社市が2010年からおこなっている「総社市地域参加型生活サポート日本語教育事業」で、私も4回ほど見学に行ったが、ここは行政の担当者（20～30代の若い職員）、講師（免許保持者）、サポーター（地域住民）がそれぞれの立場から日本語教室に関わっており、生徒も常時20～30人が授業を受けている。教室運営に関しては文化庁から委託されたアドバイザー（中東靖恵岡大准教授）がカリキュラムや独自の教材づくりにアドバイスをしており、岡山市にも同じような日本語教室があつてしかるべきではないかとの思いを強くした。予算については、文化庁が「地域日本語教育の総合的な体制づくり推進事業」という予算枠を4億円もっており、応募が少ないために使いあぐねているという話を聞いたし、政令都市である岡山市には文化庁の方から申請の打診があつたにも関わらず申請していないとの話も聞いた。

昨今では全国的に夜間中学に外国人が通っており、岡山市でもいずれは外国人の比重も多くなっていくことが予想される。

こちらも同じく文化庁が「夜間中学と連携して実施する日本語教育」ということで補助対象事例をあげているので、今後の日本語教室のありかたとしては、岡山に夜間中学を作る会とタイアップして夜間中学の中に日本語教室を組み込むのもひとつの案ではないかと思われる。

漢字道場の授業の様子

